

平家物語 巻第五

和装本

リ 5
2004
5



2004
卷



平家物語卷五

法皇御灌頂事

學生堂衆合戰事

善光寺火入上事

中宮御產事

陰陽頭恭親事

室泊遊者歌事

西八條被立札事

宋朝班花大臣事

不却桐地
蔵書之章

廣辻氏
蔵書記

巖島次第事

西八...

室...

朝...

中...

善...

皇...

法...

平...

法皇御灌頂事

治承三年正月一日院御所に比拝禮行禮四日朝勤行

事あり例御まうりたる事とる礼より去年此夏成

親々以下を皆此人、尋々失たる礼一、事、その

ら法皇思一、其礼之由横い、休まらん世

此政物く思ふ、ゆゑの事、有る入る、

尋田藏人行儀の告知、せよ、清ハ君をり、清のめ

た、此の事、思ふ、世間、おとけ、しる、事、なり、

上の事、おとけ、おとけ、おとけ、おとけ、おとけ、

おとけ、おとけ、おとけ、おとけ、おとけ、おとけ、

之世有之 七日彗星来此方 小中光を十餘る 十八
崇光旗より又赤氣より中陰陽頭恭親朝臣中
と崇光旗より有る赤氣より天文要集の如くハ
大白犯昂井者天子浮海失珍寶西海血流大臣被誅と
云り此事は及之れやんと人功やふをて法皇の三井寺
云願僧正を以師範として真言秘法の傳受せりいある
し今もの春大日經金剛頂陀羅尼悉地陀と三部のむ
わくを受内せりい二月十五日園城寺小く灌頂あり
應子由思る有と聞て程小天台の大衆此事を憐り

中者昔が今日に之の如く願頂を受戒告我山とてけ
内せし事と先規也志るを就中山王此化及ん
受戒灌頂此ため也今三井寺に之をせりい事然ら
應るんと申考礼を以て極へ修り礼考礼より例の
大衆は此の一切院堂を用す三井寺に之の灌頂
有應子あつと園城寺を燒拂をりてせんたすとい
考礼より加修する願を思ふとてせりい考りて礼共
法皇猶其の本意あり礼を云願僧正を三具して天王
寺御事とて五親光化を以て毫井の水結ひ河あり

五瓶此智ありて佛法家初の靈地なる持僧法言ん
てを是とせおとすある山門の強動を志可めん
あはんに三井寺の法言んてをとりたりに礼より学生
堂衆と申思てて世に乱るといへり又いふ事何ん
するやんと恐く此事を此の表に以義竟四部敷
俊哉を中國へ下向して釋迦堂衆来衆序立をく神領
をわき(元)知此祿を揮ひ来衆念をかして敦賀の法
よおる義竟四部を法ん打散し物具をたれえ之社及
りる志ある山に述入る夜にたれえとて山に衆徒

に祿(元)大衆大に憤りて勿心し強動す来衆序立又堂衆
を語らば同同心して来衆序立をたすんとて是禮川院
其頃中宮とやりの表の章程が常にいふに礼心して
供御をのりしきまの志あるりうちとけえあは
てしうん何のいささの及んた想く天下の十日別てハ
平家の怨と山持みへ大政入る位居起りんを惑しあふ
ゆは諸寺諸山に山に經路の法文諸社を帝使をさるる
陽御をさるる醫家藥をさるる大法秘法所を修せし礼た
かくて二月を神を程に由ふあたりの山をいふとゆへ

一ノ平家日記を致し之を引之今ハ悦を皆有るは
懐妊の事定りに多礼と高僧を僧に修す由是安を祈
り月星宮に祈り皇子誕生をいひて王上令ら子
大にあはせり皇子ありすいひておひしき中宮
サハカセり皇子誕生をいひてあはれり
相國二位方少皇子誕生をいひてあはれり
お悦を礼す平家の繁昌時を治たり志の礼ハ皇子誕生
くといひあしと人の中宮かをく程六月十日中宮御
著帯と我刺へく月日治りら修す由は修す由は修す由は

也常よりのおもひは此に井入るせりひるかの面やあて又
いふふふはせりあはれりあはれりあはれりあはれり
しく我やいらせりひる波漢の孝夫人の昭陽殿の病
乃座小外くはりらんかやるらん人の中宮と名
桃李の雨を合み芙蓉此風は志はあはれりあはれり
るはは有格也かを中宮の此折やりにあはれりあはれり
物の孝度いひてあはれりあはれりあはれりあはれり
ひまふくよまはら明王の傳小かやえはぬくの靈は於礼
なりあはれりあはれりあはれりあはれりあはれり

中忍念成親の西光法師。おんアヤ丹波が持成
師平判官入彦康頼法勝寺執事俊寛かといふ生果と名
ひかり是ふ此れ入彦相國といふ果ともいふ事この事と怨
しく聞かれおんこのらふた由乃以政ゆえしと
そのふし節りり川原の章おんこの改とある丹波
が持成事おんありと礼を此おをいふ急事小太
内大臣志をとりお向ひておまんの由新にせぬの
攘災ゆえたりし剛へいひつる事とゆひし非常
大赦にさたる事有るまゝん就中成親の御礼ん

かよの功德善根といつてつらた大納言の怨靈をあら
めんと思おもしんに侍けと先生いふ成親を出たるを
お礼のめし此事取やせしとて存りて始りし者
此思ひと命と危くみん時強にうま思ひを
乃丁盛うて河れいりしお持を中飲らんする
昔と耐の中いしとて盛を恨るを涙をあらう
近き及るん内中いあらる宰相殿の門のうし
はしとておん親を持はる此時はわいしと宰相
行きの親社持つれおといふ持一人中飲らむしと

恨みから實りとおろへていたく世を人におろし成
の事志るをたれし中しはせめしとなくくをたすけ礼
と内府の法をかゝりて子のふくまを重盛の身より
みえらばは我思ふ礼きり免るいの中いしとて八条へ
渡りなすりて入るにけしといふくゆくゆくはをきれ
八宰相乃成統の事を強ら歎中しは礼なるは世を
におほしは世許の久しとておろし中宮の法老の法
はくおろしは人すまきとて是中大方と人の礼を叶
はせ給ひては願成就疑ひたへくはは願成就せら

皇子誕生有る家門は栄花彌盛かきしとて
おろしとておろしは入るも今度と皇子誕生のみ
入る以外にやをたけしとて思ふ礼しけしは後
康頼の事いふと有るは史をよめし礼といひ、
去らへくおろしは一人ありての礼は人幸中し
その罪業もよおろしは人すまきとておろしは康頼
の事をさらす後寛とみられは礼しけしは後
の口入を法勝寺の寺務にり中成かきしとて人と
おろしはこれより人おろしは城郭をよめしとて幸に礼

と守るぬりをはいひある由聞つことに奇怪は
申ふともいひながら中宮御考此の如くによりて大赦を
行らんとし入る中御礼多しと別職事の中書と中
右の事同七月上旬丹波の如く送りし久死事
一定小多にあり其然云

為中宮産御祈依は非常大赦産摩方疏黄
島流人前左方將藤原朝臣成程并平判官藤原頼
法師可合歸泰之由氣候也依作執達如件

治承二年十月三日

と執書礼なる等宰相是を聞ひて悦ぶと斜めす
少将の北方に於現も是れをすすめし志川平之
等おもむき七月十三日使たる孝礼は平宰相察り
に執りて秋の儀のいをお済む候を以て継て下
礼と此のい多し何れも礼也此礼も極に於た船政あり
祢と波風吹く之船中より日を本よりある程九月
半ごろ於彼島へ入りし付ふる島に春さ友たけ
る三年を死送りある折や日さうらうとせめ給と
藤頼が政に出之を詠礼をすんくはる

海上小舟に乗りはるる物を怪みて入る後何の
沖に眼よめたる物乃何と何とせしがぬのまゝ礼は
床頼是をみよにははるる浪小たれよよ小舟
と中より舟中を往くを見礼と舟の神よみぬ
る是は端島七浦人たれよよを堰上渡り車乃
何れに何れと思程に輝りく小舟にせよ船中いひ
つた羽をも刺れ何れよ思ふ都の人若に何れ
か物思ふ礼ならも我れよ何れに罪を多ありく此島小舟
はる人ふとに何れと思ふ礼を思ふとく小舟よ安よか

く都の車共をり尋とんと思ふ口より礼よ中舟の
にを舟時と各よよ有極をみん重のはつう
よ思ふたよた瀆本よえの木の下岩の陰小体ら
ひよよ小舟に何れ待礼は何れはよ船中何れ急
下りよ我れよ方よを往く後寛信都修りたよむ礼よ只
父の悲小思ふ事何れよ神明佛院の由名を唱ひ何れ
すよ此然地修りせよ常ん岩のは何れ苦の下に何れ
母よ礼よ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ
此人若れおるよ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ

此の教書并平宰相友由出お登られ之部(出)歸(と)た
由の由使(と)す(と)丹波(と)お友(と)のつ(と)ま(と)や(と)せ(と)ひ(と)や
ん此(此)都(都)教(教)を(を)衆(衆)せ(せ)い(い)や(や)と(と)中(中)に(に)思(思)ふ(ふ)る(る)か
孔(孔)を(を)夢(夢)や(や)ん(ん)と(と)地(地)思(思)を(を)孔(孔)も(も)三(三)人(人)一(一)處(處)に(に)お(お)ひ(ひ)い(い)し
ま(ま)ら(ら)急(急)出(出)向(向)ひ(ひ)け(け)候(候)を(を)孔(孔)も(も)此(此)中(中)に(に)入(入)ん(ん)方(方)共(共)
か(か)つ(つ)て(て)三(三)の(の)由(由)文(文)の(の)一(一)の(の)を(を)忠(忠)一(一)入(入)た(た)の(の)既(既)行(行)一(一)平
宰相(相)の(の)私(私)文(文)也(也)僧(僧)都(都)の(の)身(身)あ(あ)ら(ら)う(う)る(る)か(か)と(と)て(と)三(三)度(度)指(指)之(之)
先(先)を(を)忠(忠)を(を)指(指)て(て)そ(そ)の(の)孔(孔)も(も)孔(孔)も(も)為(為)中(中)宮(宮)の(の)老(老)の(の)初(初)候(候)は(は)初
大(大)紋(紋)成(成)既(既)原(原)形(形)の(の)論(論)泰(泰)と(と)る(る)孔(孔)も(も)俊(俊)寛(寛)と(と)云(云)一(一)行(行)り(り)か(か)の

て(て)あり(り)僧(僧)都(都)我(我)身(身)を(を)い(い)や(や)り(り)孔(孔)も(も)あ(あ)ら(ら)う(う)と(と)思(思)や(や)り(り)候(候)双(双)眼
小(小)う(う)ち(ち)ひ(ひ)ま(ま)せ(せ)ら(ら)ん(ん)地(地)を(を)せん(ん)あ(あ)む(む)角(角)と(と)て(と)又(又)孔(孔)も(も)俊
寛(寛)と(と)云(云)文(文)字(字)は(は)か(か)し(し)又(又)孔(孔)も(も)文(文)と(と)あ(あ)ら(ら)う(う)孔(孔)も(も)三(三)人(人)
と(と)ん(ん)上(上)手(手)孔(孔)も(も)あ(あ)せ(せ)あ(あ)て(て)の(の)悲(悲)し(し)ま(ま)ひ(ひ)り(り)け(け)と(と)平(平)に(に)ま(ま)ま(ま)て(て)
ひ(ひ)ら(ら)た(た)か(か)を(を)ま(ま)の(の)け(け)を(を)み(み)つ(つ)て(て)い(い)か(か)し(し)置(置)ま(ま)い(い)と(と)す(す)つ
して(して)伏(伏)す(す)あ(あ)ひ(ひ)ま(ま)か(か)の(の)け(け)に(に)け(け)ひ(ひ)懸(懸)く(く)ま(ま)の(の)涙(涙)を(を)か(か)う(う)ん
柝(柝)無(無)う(う)と(と)し(し)大(大)現(現)也(也)現(現)と(と)し(し)又(又)後(後)の(の)や(や)り(り)不(不)あ(あ)み(み)ら
ん(ん)ち(ち)し(し)て(て)の(の)孔(孔)も(も)つ(つ)ま(ま)り(り)た(た)は(は)し(し)理(理)り(り)や(や)い(い)つ(つ)か(か)致
ま(ま)ら(ら)ん(ん)三(三)人(人)同(同)罪(罪)一(一)人(人)此(此)島(島)へ(へ)か(か)ま(ま)孔(孔)も(も)文(文)に(に)つ(つ)ま(ま)は(は)し(し)孔

僧徒一人殊尚り久し誠よせしを思てこれけめ二人の悦一
人此歎水火の違車のたての事をみへし僧都泣くが
礼多し二人の動見を振りて返す礼後寛一人惠深り礼
と上らるるやハハ中物を是に入らる思しを口すこれ
ひたらし又執事のつとめり中入人のあうりたること
は暗りりと天小作事地があうり中悲しく世を
限かく是をすし誠小理と思へし都の由使りて
世あんよえさく目もあうりせず日比の思ひ歎筆此
りの非す殊りあんと思ひひらるるやとせん方かくいふわら

をくしりて是す其上が物なりとに宰相なりとが
旅に粒物ゆはれ米さふらにたり判官入るのり
或は妻子或はあうりの方かさめくの消息有る礼
し人僧都のりえと一紙の書す文りあうり今ハハ
あて乃者都の中一人りあうりし知りたにほけく
り歎の深まり限かくほれいひあうりあ世の為業やら
んを思しあうり持り判官入るの睡風のまたは
及る今一日とし急きいひあうりしと云すあうりし
あうり僧都録のあうりあうりあうりし二人の人あ

かどめををかすかめれ神のなげくも涙をわす
支入の杖をむくくもほけひらりまじり比の者おん
ほれをよき昔物りなすくしていそぐ都のあしまるを
り島へいづちをもちふ居すよおれ有はるよおれを
まじり一日片時かんとんすあまの地をせんおれおけれ
都の思ひひらりもんきく舟にちあせ出せり(庭の舟
きすとも成くま手おれをあん中へ志んらるる業と
りやれ方づり渡りゆき思縁と有(まに後寛入
はあせとちりえ島の手りりこからんるあをさるる
たれ

とて又おのたさげひけれとめおかなく此あひらるハ誠小
けおれ思ふおれを成所へ花登り嬉しくさハける事
いへともほ何てせぬをみをたせりおれを文おれ其
いといひはら申あしもうておれを都のい史り時
お由りら三人船はをいへくと開元事おつり
ぬいし何まししてりひるた命申おれ大切おれ
成経るおれおれ身うられといひ宰相おれ中合く
りるおれおれの事おれいしとちさハ入る後事おれ
かろいし何れはりお身をかけりりかききいりり

しつ今二交都の書は礼を聞んし思志百礼ひつ
免其の程を口比おをせくやうに思かしく侍せりしつ
くもかきよめかろういふくらん礼を備都返すもをん
がゆいものをせき俊寛をとほく置りあんとすつた、
俊寛をよりしつて登りりふつしといははとのめりつと
又いかきあひつつかとほりつにふと死り礼ををけしつ
ふつく天孫くあきし程の人をいふを礼をか死すくつより
はつてまきつしつりも出れり礼と思を礼あ礼誠しあ
おかしめすめのとせのめいふめりかきつと夜のあき

まを置れり判官入るたせ心礼形すまし本寺時鐘を
持てのる誠小花乃書様ありして志望の山(吉野
此更(島入人)風小舟ををりあれ散ぬら後、木の下
を惜むとを岩此枕小夜花あえん家路をいそく長月乃
秋明月を尋とすま明石(浦傳ひする人)山乃はたつ
ふくをめしつて礼入ぬら後を志すひとつめのとあや小窓を
りつて返り改をぬるきとひあちまきとふ人追り
我身にすあ物や物もあにいひをしつてあつと判官
あはれ心を懐かたはれ人のむらぬ本下回かえを

く世も誰も過りて名残なきを惜み我も是れ
にやうして僧都の心中に我れも母もあんなに
よりの死に僧都もあんなに死に杭をとり
漕ぎんとす思ふ境うのく世も母もあんなに
てきくくしてふんせよやうとおのれもあんなに
之れ事にもいふ方及んと惜みとあんなに僧都もあんな
たに船もあんなに急ぐとあんなにあんなに
をせせしめ其の有りけりあんなに死す
押出せしめ僧都もあんなに急ぐとあんなに

あんなに急ぐとあんなに急ぐとあんなに急ぐ
早入りの船もあんなに急ぐとあんなに急ぐ
もて又若くあんなに急ぐとあんなに急ぐ
もあんなに急ぐとあんなに急ぐとあんなに急ぐ
とあんなに急ぐとあんなに急ぐとあんなに急ぐ
して母もあんなに急ぐとあんなに急ぐとあんなに急ぐ
をせしめあんなに急ぐとあんなに急ぐとあんなに急ぐ
あんなに急ぐとあんなに急ぐとあんなに急ぐとあんなに急ぐ
あんなに急ぐとあんなに急ぐとあんなに急ぐとあんなに急ぐ
あんなに急ぐとあんなに急ぐとあんなに急ぐとあんなに急ぐ

よふかきかえりつらつやくの宮りかろり出れり
舟の船の白浪内を飛く山をよもれぬや清みれぬ
かれ共海に乳を吐れ清みり乳の岩の上にとりて
舟を招ける彼本浦中よ船の唐船を志しひは
ひれあしつらふふいれり又おしりまらふさき
持此情乃詞をねえりの中身を投たり多かてせめての
罪を乞ひととて早くとれぬハの屋の伏魔三
均へき宜も受す法は例伏神の言をまかしてと病ふ志
ほれ治さるれ清みれを打きまを打き血のあまをさ

うと夜すこのくもたつて乳を吐く神を海すをいれに
ぬれぬあつた情りあつた物る衣をり知し人る乳をか
らる母さん此事おをさしつたかとやれとりしつたか
やとれとつらふれを廻りて命れしつたまんじりる海を
すつらふをかさねのつらふとつらふとつらふとつらふ
とあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
兄弟二人をりれをかす母方りやあつた人仲絶の止しり
はたとやる方とつらふと九月はさく島を生ぬす
ま小娘の上つたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

宿願の事願を成就志しりよ願をまげんを正宮に
と奉請くはひる所のすのこ房の御りとしよ處か
床更島近の淡本入は向島を成しはては旭照八
幡海しははまりまよりありそと宮中の馬場靴
印法及を中許に宿りはたり湯无出しそしをみ
せいせまぬくは身骨かとしそりその後正八幡宮の内寶
前にまゝりまぬく念誦を折るは月の夜あつと乳宮中洗
ふりたふ面あつとあると臺明寺法師に後惠境房の志や梨
とゆふ事々の放教のありしとせとく妙持人う松を

とくしを乳あり

月まかふ一 月宮をかたり一 定れいりか色ハ
十よひたえのてりまきりるん
と知しえしし ことまを乳るるんかき終の男婚の女ふいさ
ちり感涙をとかのしるるが好ははるると古の車を思
川しるふ當社大布はりのとろふみゆを乳をあさる因
位乃由時上人王十四代仲哀天皇皇后沙路女伽陀女神功
皇后のハ股と宿り時新羅高麗を役向して我朝を
討んとあし時皇后女帝の御身しとく新産を打年と

本朝一掃すしき王子老あり應神天皇是也其後
唐國に陳れ大王とやましくたせ女の姫君やとありひる
俄にたぬるありまんとした父の大王信られるは海にあり
いづらふぬれりかくし皆ゆれしと尋るるは姫宮あり
ありとありとあり子ぬかす朝皇孫の中をえをすし給
ひ川の時より石にたかたをたれかたは他をたれり
中あせりハ大王信らのはをを三集と勅入夢にたれり時
各中多る當州の王にたれり是は東方に日本國と云國の
神明しとまきり奉刺す大王勅定ありけるは叔は此國

くそと誕生ありてす親子のたれりとおくけれは日本へ
やりたりと珠枝銀牧印鑑を授け中々唯一人たれり
れせちと波をたれりを浮へ万里に波を凌ぐ
巨海をたれり日本西州大隅の國姫木浦稚子の島あり
夕の鳥の羽音の聞へたれり汀をたれり思はれは姫
君ありたれり用くは説けりては汀にたれり浪の巻
たつら鳥と山鳩也の梨子の鳩巖とみと今の世に有
たれりたれり鳩やれり名付りり姫君は乃扶蘇をたれり
は最初は吾朝の着るる時中迎ひり衆りにたれり故也さて尚

國の大神をうつらひと大隅の國の王早人をうつらて石城の
岩の上にてとてひしく早人夫之後亦よの肥前海老隅の禁
頭良向乃申小宮室をたゞ玉子を考め（り）則天を
仰ぐ我正受の位に即思神号を證せんと言ふ
く其時天より八の字に降下りし故に八幡大菩薩と
号す今此七七の姫宮と申昔の神功皇后是也應
神天皇と申今この八幡大菩薩の御事也因位の御
時も母子と成岳跡に今も母子と申海人山梨の程
此めきたるを凡夫にうつらしたる本地土所を祀り石佛

此文深沈八十巻入り入に河合治言昔於靈鷲山説妙法花
經今在正宮中示現大菩薩と云也此とくハ本地釋迦と
是しる本朝とハ幡三所と申大隅佐野山見を三處
ハ幡と申也中も正宮石佛と申す此りハ大隅を正八
幡と号し愛小本朝異國の賊徒の襲來より其ま
たハ御事ハ牒使をたのむて大船一萬艘着て漆を
こしせし當かよよ漆のてこよせんとする處に歎
をよせしよの一夜の中に田畠二千余丁斗の島を
つるをぶの島のけ異國と云川と云く異敵と云や

く不道散りぬ故に彼島を向島と号は是則八幡大井
七は力也七力の姫君とハ昔の神功皇后因位の悲
願也此ハ筑前の國糟屋東々香推宮ニ跡をた化す
すん聖母大多羅知母是也天敵降伏此きあす女帝の
自身にふんく此遺物を逆謀を布けふを智慧乃銀を
振りて本朝此悪賊を治めぬは日夜に君を守り
たり國を助り靈神也抑ハ幡大井宮佐宮より教和尙
七被に布とつしきしとて甬山岩清のたつと和荒同慶結
縁始ハ相成道利物終とてさくさく方便をめぐり

靈跡をたれりふ石津治文の如ハ幡の本本地を釋迦に
やらせりふを末代のいふととハ教乃神ト舎りひ
時より弥陀乃三尊と現りゆひき大井の山奈り放生
舎といふ事あり神功皇后の昔天敵をせんとして早珠を
大海に入らぬいふよ多の生を亡く大隅に在りてハ西島
をいふありてと救多のあり今をたれりと此ハ彼
きりやれ為りては演殿と名付て生るをはかつ舎と号
してがんりし無をともあしきなり毎子八月十五日の放
生會は是也争りてめてなき冥神よりらせりし因

位の時本國をさしおはひて父母の品おれはけしき出
くおふしめし礼を免するの由歎を思ふおれけしき成
思を体の内せあらんと思ふまじくおれけしきおめてし
ろくは衣をえらる明と礼を宿氣と申すおめさせた
すいり高の主法たる妻女おめめめめめめめめめめめ
人也又我大臣殿の侍に左衛門尉朝重と申すある娘と童
名斗主友と申す有る大政入る友の西八條に宮仕して伯耆
の局としていり糾かひる守田花守のしと事柄も優也多めめ
又悉くしてかりおめ事と申す小おめ流し礼多し之後伯

耆よりおれ心苦しあは言仕りすいりくおめおれけし
引おれと悲入る有る法入る入る友の西八條に宮仕して伯耆
一登りある時入る友乃内と申すおめめめめめめめめめめめ
らすぬ此おめ友をす初より命も堪えぬしと申すおめめ
すのおめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめ
おめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめ
思ひたる舟に見舞ふと申すおめめめめめめめめめめめめめ
おめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめめ
虎伏せありとも尋まかしく思ふおめめめめめめめめめめめ

口のほうは、姉へきて、恐く彼使船をくく大隅より
 あり、法乃家へ、法乃を、おのつて、市をあらんと
 思ふも、急とみ、事りか、け、此を、つ、れ、た、は、せ、せ
 来るをも、思ふも、當時、あ、か、い、と、日、程、を、余、り、に、お
 と、つ、れ、を、つ、し、と、致、れ、を、い、は、法、乃、を、い、ら、ん、誠、に、お、お、あ、ま、つ、ま
 か、い、と、て、日、本、國、も、い、も、お、れ、を、仲、乃、小、島、い、い、と、う、島、と、や、氣、い、
 西、流、は、れ、と、し、う、し、也、役、の、凡、ら、お、れ、の、吹、る、番、を、れ、の、舟、の、引
 事、思、ひ、切、なり、人、具、し、ゆ、い、事、の、思、ひ、よ、ら、ぬ、事、を、れ、の、男
 女、の、習、も、せ、が、あ、ら、ま、ま、い、う、せ、し、仲、か、う、う、を、時、の、心、ち、し、て

是、ゆ、い、程、ハ、カ、カ、い、も、多、り、何、つ、と、さ、う、い、か、え、た、下、級、と、げ、
 お、い、し、ま、せ、い、ひ、い、時、を、い、ら、ぬ、の、余、り、に、消、り、去、る、ん、と
 止、り、て、我、を、え、ん、へ、う、却、を、ら、う、れ、出、立、た、ん、ん、を、付、す、途、中
 必、然、ら、我、身、を、南、長、安、偈、家、に、女、乃、高、い、か、い、ら、れ、乃、陽、江、の
 既、に、控、ら、れ、ひ、こ、を、釋、して、かく、は、み、ん、ん、中、の、是、と、い、は、さ、い、
 と、せ、お、か、い、い、法、乃、を、た、ら、し、あ、ひ、る、た、ら、し、髪、を、す、し、い、い、
 其、伯、者、を、志、す、く、三、つ、程、ハ、叶、ま、し、い、と、ぬ、を、え、さ、せ、し、と、こ
 ひ、く、夜、毎、に、正、宮、に、通、夜、を、し、て、終、ら、法、華、經、を、し、と、志、し、し、
 か、お、れ、の、行、を、志、す、ら、ん、實、し、叶、り、ら、ぬ、や、の、事、は、再、均、あり

三ヶ所掛と云ふ所の盜賊雜具を追捕し取ら大納言
の長上城郭を搦と三日の八日夜堂衆登山して東陽
坊の城郭を搦と大納言の岡の所の處の學生と合戦
堂衆八人遊をいふ事城戸の廿の處をたり事らを學
生義亮四部を始して六人打出と一時斗らるる事
多程八人乃堂衆引退る事を義亮四部うち志りて
長追志多程の堂衆逃して今又打と事處の義亮四
長刀此柄をひら卷のりし折るりし力を振てもの
之掛り多をいひを打落しぬ大將軍はのみなる

四部討死にけしハ學生かち多事十日堂衆東陽坊
をひらと近江國三ヶ所へ下向して國中の悪堂を
かいらふ多の勢を引とつして學生を亡んと堂
衆のりいらをれいら所の悪堂と事古盜古強盜山と海城也
也の来たる也事米と結布の敷をいひけれハ當國
の限り他國のり付はとと揚州河内大和の武勇
は堂衆人のとく集りると事一程九月九日堂衆於
多の勢をお具して登山して早尾坂の城とてくをり
事入る梅路の學生不見をいふ事其れは所んく事

後此礼以安々々其事小思法一何々里をうりまきまとい
ひいたり大泉云家に奉聞一武家云礼りるを
堂泉等師王の命を背く悪行を企る間泉徒亦絨を
かる所小諸國也惡徒をおくらひと山川はつりして
又戦十と小度一とたんと學侶も多々討礼也佛法心に
失もんと十早官兵を内へりて追討せざる入
と中是にあり之院を大政入り作り入り及院宣を兼
と紀伊の國乃任人湯淺權元宗重を大將軍とて
大泉三年人官兵二十と紀都合廿と礼を内へりて後のハ

十はと一人并和泉紀比國任賀任勢持津國河内也武
者也志りの記者とありは十月四日學生とらん兵を
討つ早尾の城へおとす今度とありとも思々々泉徒ハ
官兵をおんとす官兵と泉徒を先をんとす此間
をわくやが泉徒とせらるる堂泉と執心とく面りて討
つりりりかいらと堂泉乃惡堂泉と欲心強盛に
死生不知奴系各我一人と戦り礼官兵り學生を散
に打ち殺され戰場に死する者二千と人負の救を
走らすと其夢一と且日學生一人おとす下治しと加す

爰小窓くは、いさつたたりかきまうに山上の堂の後院
わたくしと絶く堂々の法塔にんちんに法學
定をとり座禪の床をむさく十四教五時の春の
花の白を三律即是は秋乃月より礼り交覺罰
神人一座をおさへ免之知る十も志あて、一程のわたり
うんすまつ系中山に之れを二のこまのんたうから人命を
矢ひ山門の滅亡朝家の中大事に及ばず事定つて白の礼
人より思慮有へたりのをやして免れる命歎かきをむ
とこり法を志むへ、十一月七日学生山上座寛賢并威後

師奇明等大將軍として堂衆をいさしりる早尾坂の
城へ押寄せ大戦つた夜に入て学生終つ責落出れく
累方へ近矣以學生の方小村者而奈人其後山門
跡のれをえく西塔氣の外へ正任の僧侶りか、堂山
草創より此方、やうに此其事か、世の末に何れ者か
はよく善者、いさくを礼りや何人いさく、智者の謀
り及ぶず礼の法あるや何れ之人か、山とありたり
中堂裏かといふ者り又ら妙にきり八日、某師の白か礼
共、南無と唱人りか、一卯月の岳跡の月か礼も、居いしく

をささるる者かき朱の玉に神はひと引志め繩も絶
にきり三百奈之の法燈を排る人も久六時不取の
香乃煙り絶へば一にきん堂へ言さる儀又三重の華
構を青沓の中によしとて木棟梁ふらして秀く四面の
たらし白誓の絲をいりまえていりて一なる山ありし
より今ハ供仏を奉れ嵐に任せ今を客を空瀝津
濕十夜の月の灯をのけそ天井のむすより電の
板間よりりる向。法華の露玉をば孔又蓮臺の粧ひ
をす余代の俗に動るハ三国の佛法り改方たすいせり

遠く天竺に仏跡をもちてハ苦釋尊の法を説くハ祇
園精舎り竹林精舎り給孤獨園り中比が鹿根野干乃
柄とぬいしすハ比み出せぬ礼白跡池にたぬたへ
そ草れふらそ茂礼り通凡下衆れそとハは昔の
二世ハともたき以て唐且の仏法も同じくあつた天
台山普賢山雙林寺玉林寺も此處に住侶りかた極上と
もてハ大小乗の法文も法の底をもちてハ菩提樹院親
音の靈像とハ身と土に埋れそ為つて必もそのそありたる
すてハ進代よ及そ為つてそをのふか礼やそありぬん

と思ひ申す事と申すもこれ我朝に佛法も又同高都七大
寺と云われはて、八宗九宗も詔したる瑜伽唯藏の西
部の外に此の又ありて、東大寺真福寺の外に此の
堂舎一室よりありて此の尾の山も昔も堂舎を
を転りたりあり共一衆の中に何れも志は今も天狗
乃柄と云ふて此の昔も去時三藏白觀三年の山佛法を
弘光人として龍沙のふきを志れりて佛生國へ入り
りひしに春秋寒くも千七年且同日見聞一百二十
八ヶ國或ハ二百ヶ國の國々も一ありて小大衆流

布の國に川が小十ヶ國と有るありと廣く月氏の境
よばり佛法流布の可難有りてありては此の事
んをすよりありて天台に佛法も治業に今もあま亡ひ
けてありて中とんを人に出すも今も一書か一離山
しり僧の中堂に柱も書付たりとのや
祈し我三社の引くへ人ありて山と何れやと云ん
昔傳教大師常山草創に後阿耨多羅三藐三菩提に
佛たりて祈すもせむひの事を思ひて讀むりありや
いとありしと聞て法性寺の法子文の由りて天台座

主慈田大僧正の時法印として出立するもの人志は此
事を出し之を雪のふりたる所の雪系阿志をこのこととして
たしむる

いと志く昔の跡やたるととふり出し合紙の白書
尊圓阿闍梨込事

君の名を稱するもきんふる雪に昔の跡をたしめ
堂衆と学生の素従を何しと志りたれかと言量部の
法師も成りあつ申らん法師もなり澄上をいひたつたりの
よせよめいせるとして徳行をけけ衣法をいひたつたりの

まはてと公名つた学生をり物もせず大陽をに甲の時を
ら堂衆と出せ定られにりなる少午の刻をりりく学生の後
あていひをさして笑ひれはり中をりりて学生是を
とりめおれと堂衆中なるいふいふをりり山を山とてかをす
学生とともすれはりり志り論依と云事なりと何事か
かといひ合りりをい合別來院に座主元明僧正治山の時
より三塔に友衆とて結成して佛の花香をりりとい
用へ

善光寺火の上り事

去三月廿四日信濃國善光寺に上り其廟の此集
とやは昔中天竺毗舍利國の一種此惡病を治りて人
半の命延びし時月蓋長者は此初より娘惡病の
此命延びし月氣を升る牙子也始と天竺の佛小
乘りて十善の口と人からぬ娘に一種此惡病を治りて乳
くと釋尊此惡病を治す術をおく人々と申分たを
何事能く言ひあると我其惡病を治す術を不知とのある
月氣重々中あると我も外なる中子とい外なる事及
も外なるの別を出し始と天竺の佛を成もとい佛を

と外なるを以て同前におしむるれば何をいふ事しと思ひ
うんとせし其時天竺此の事誠といつて佛の惡病
を拂ふ術を治す人も是が西土十方億の國を隔て
土名を極示世界し各付其院主何院院如來と申
此をいふ人無語すまの七と六種の惡病を治す
法は自ら人十の我を教り月氣重々又天竺の佛と
法をいふ西土十方を遠くたると此をいふ如來をい
いつた法すまの七と六種の惡病を治す法をい
ふ人をいふ人十の我を教り月氣重々又天竺の佛と
法をいふ西土十方を遠くたると此をいふ如來をい

中(書)の也仙のつゝいひ之後天竺よりおん
事昔歳佛法東漸此理を而濟國に渡りおひて一千
歳の後仲明天皇(西宮)に及て逆臣守屋の合(ひ)ま
か(も)の堀(原)にすまられと光うの(と)を給て後聖德太子
世(出)りい(と)逆臣(比)守屋を討て難波(天王寺)に佛法を
弘めり(と)時信濃國の民本多善光と云也と告り(と)善光是
難波の京(臺)り(ら)め(め)來難波(堀)に(を)生(ま)り(ま)す(す)方
(光)を(も)あ(ら)つ(つ)何(を)あ(ら)わ(わ)し(し)て(て)あ(あ)ひ(ひ)多(多)と(と)汝(汝)我(我)三(三)生(生)の
當(當)ん(ん)か(か)也(也)我(我)と(と)汝(汝)三(三)生(生)と(と)奉(奉)也(也)汝(汝)を(を)侍(侍)ん(ん)と(と)難波(堀)に

光を埋(ま)す(す)年(年)久(久)し(し)汝(汝)過(過)去(去)の(の)因(因)縁(縁)志(志)す(す)ゆ(ゆ)め(め)ん(ん)つ(つ)と(と)身(身)不(不)た(た)け
天竺(小)く(く)て(て)八(八)月(月)の(の)長(長)昔(昔)と(と)い(い)ひ(ひ)た(た)而(而)濟(濟)國(國)を(を)齋(齋)明(明)王(王)の(の)司(司)比
日本國(國)に(に)渡(渡)り(り)公(公)事(事)國(國)の(の)民(民)本(本)多(多)善(善)光(光)と(と)云(云)也(也)と(と)告(告)り(り)公(公)善(善)光(光)是(是)
を(を)あ(あ)て(て)三(三)生(生)す(す)て(て)生(生)か(か)す(す)い(い)せ(せ)る(る)契(契)此(此)程(程)七(七)年(年)に(に)善(善)光(光)神(神)を
齋(齋)小(小)河(河)と(と)て(て)声(声)借(借)す(す)ん(ん)か(か)ま(ま)り(り)良(良)久(久)河(河)つ(つ)て(て)後(後)を(を)ヤ(ヤ)ー
但(但)せ(せ)ち(ち)な(な)れ(れ)ば(ば)河(河)に(に)觀(觀)音(音)せ(せ)ん(ん)善(善)光(光)後(後)に(に)飛(飛)付(付)り(り)ひ(ひ)ぬ
善(善)光(光)を(を)如(如)來(來)負(負)ち(ち)り(り)て(て)來(來)り(り)し(し)て(て)ま(ま)り(り)て(て)ま(ま)り(り)て(て)お(お)も(も)ひ(ひ)
祇(祇)る(る)を(を)只(只)し(し)れ(れ)ば(ば)如(如)來(來)善(善)光(光)を(を)お(お)ひ(ひ)り(り)か(か)り(り)る(る)ひ(ひ)ら(ら)下(下)て
り(り)い(い)善(善)光(光)に(に)程(程)ふ(ふ)く(く)中(中)意(意)し(し)ぬ(ぬ)い(い)と(と)云(云)は(は)れ(れ)ば(ば)來(來)木(木)内(内)郡(郡)を(を)う(う)み(み)の

東人本多善光が置中より来昔八十奈子の早お
を送りあをたてたに王法うらんをい法先滅
とこのまははやくにさうのやま重なり寺靈
山も多減しゆる王法の末に此をの瑞相とやと歎
けり

中宮御産事

十月十二日寅此時中宮此産事いさるて天下
以志りゆへり去月廿八日此時よりなせおし
まうりれも取きたる御事とある程に此境がいひまら

取志りゆへりとも産事いさるとて東家の一門と中上及
もす実白敷を始中より公令殿上人此衆はらる法軍と西表の
小門が御事からいん志中より房覚昌雲惠僧正家禪
實全兩僧都俊亮法印此上法皇より初中させりり
内大臣の善忠は法皇の最後をいぬ人よりいけり違
何事引きて参りあへり此事をも之よりいける控亮
が推盛左の法皇御越前侍従盗盛杯中のつき事いせ
る由馬士足由奴七腰由衣十二依廣より入る参り礼
たり此中より女院后より此産事のい新し時小

代りて大赦の事先例也且大治二年九月十一日
待賢門院北山産常法皇誕生時也大赦の礼
其例として重科の者三人寛宥せらる内裏の使者
中かゝる在中の通親御は左中將降房朝臣右東門
權^佐御身仲御は藏人平泉龍景名三返宛地衆が永
壽のと察の山馬を給ふ是を糸の今度其後か
殿上人おのゝ車より馳参せらる氣氣杯の騎馬でも有る
八幡加茂日吉春日小登平野大原所おとくは御有^庵
キより一山を三の岩白井の法傳三世の御事なり全

去法印とを聞へし又神社の山岩法加茂を初と
少所所いなり祖家今西文東光寺に在り四十一所
佛寺の東大寺血福寺延暦周城^宝法隆寺宗寺た
在り三堂年来歳待の本尊改伏し中々各建燈三々
寺にたりとせらるる色々中としかくこのらういの
礼の誠の内をばとわけておぼゆる法皇の山岩の然なり
けふ社今一事をり人々皆身の毛たち涙をふり^{お礼ハ}
おぼゆる御事ありこのむらたが打志のそめ法皇は懐
をくおまひしとせむしとて千の種をなく遊して作の五事ハ

を二足糸くせとせり其例お叶へり今度二條大納言
邦隆神馬を二足糸くせとせり事然らん人
飲り志の立り徳に余り物を志らさるとん中
幸り仁和寺守光法親王八孔在經山修法山座主光
使親王と法師法長史四無法親王と金剛童
子法此外大座六観音一孝令痛きん
法六字何人八字文珠善賢延命大威盛光のいら
と幼素もやるた佛土法印三孔之宮身土佛茶師并大
尊乃像造始らり内彌經の法叙衣諸事諸社也終

り中史と宮侍乃中と五友亦勤平文持衣小帯段
したり者せ乃東の對り南庭をわりと西の中門にたり
たり見物少く有り相國二位殿は法也物を
おわへり余の事とて我の有り礼をたくとりた
礼ともおりきる礼と字の陳れりと加くりおをせり物
をと後も入りのめいもる新大納言堂元法師格の法物
此堂法也もも有り山座と不ありやん時刻を行りたり
けれられん志の面とありのうけと本堂本山の
堂下れ人二月小法と収めると上と者も志也終
終り

至り出り書を内大臣齋と天をりて入とん地をりて母とん
と祝祭らせと今代吉文字此語九十六文内書りておきて左
と内ほれれを切書りて少く故建基門院七由妹守此由方はた
三齋とて少左衛門督時忠江の北方洞院友由乳伴小齋の由
にり田基子の御をいりて并致負佐け物と是をり
つ是又例何の事と西法皇と新慈所一由齋語及つて
有れ急き出せ給かんとしりて由車を門外よりてられたり
昔より女御后の由是るの事ゆれと太上天皇の由儉者由希
代七例と前代より由す後代より有るかつて是と當帝

此後言こそやいらせりハ法皇の由志^我ゆりてと文政入を
おろくもなる故也但此事か致く志す似り志るつてん
し中人よりたれりる者由少しを故女院うけさせ
らぬ由事よりませぬひりハ法皇の由憚思にけり今も女院た
りやとせりしりて中書りしりてせり給ひしりてととせり
礼より由女房よりしりて由ひりる富士綿手両美緒更由
ゆん者此縁ハ法皇にまいつてらりてと珍事と
及け礼此送文を法皇由祝りて丸を奉ん者として
たにかを作る事刺来十七日法任を奉りて由給る

かぶる力へしふと申す京^重家合多し信陽頭助以下お
くすいり集りたりけるふ占有るに亥子巳寅の時か
と申す姫宮と申す信陽正安部恭親朝臣一人申す由
産と只今あり皇子とてやいせりてと申す詞、申すお
けしと申す由産ありて是十の由と申す内大臣余り
をのせはてむしとてい終りの時かといふに申
けるに申すも姫宮に申す何とて恭親も由産只一人
ありと皇子と申す申すも申すも申すも申すも申すも
既に是に申す由の有るをいふと申すたり、至自余也

けしおと申す時刻不定、姫宮かといふに汝と只今志
うの皇子と申すも申すも申すも申すも申すも申すも
う流しと申す申すも申すも申すも申すも申すも申すも
りたは或時春ぬははれくと申す物と申すも申すも申すも
と申す人に出すも申すも申すも申すも申すも申すも申すも
かといふに申すはつと申すも申すも申すも申すも申すも
物言に申すも申すも申すも申すも申すも申すも申すも
よ、何れと申すも申すも申すも申すも申すも申すも申すも
んと申すも申すも申すも申すも申すも申すも申すも

其生にちうと申せりとされし言ひ暗くくらりくら
まゝもしく均れしとていりたといふ此推糸
の各を上る也其時の君は西幕を此幕の中ありのを
おろすいせしゆれれおあへてみる所小倉木
枝をもと西へ行をみるなりと申れおあゆ物のお紐は
紀事し有るとおほのしあつた左大臣殿此申なるお
を申せしと申し楠を申せれおあつたお菓と申しと
十粒を是足と籠といふんと十粒お前なりといふ申張陽
道すはれおんすゆれおとさぬおんと申たりけれお細

かしく申し用ひぬゆきに徳を施しに事お茶うけぬ
其跡を定之代よりいり同推糸母のしと申すは
皆人にお色を失ひてきしせぬいり得ぬ君おはゆせ
ぬすお親小倉産をいりてゆれお陰をいりてわけぬ出
ゆせぬいりつあふもさるおとぬいり君又目度男子にいた
らせおとすいりいりおおおおおおおおおおおおおおお
いり大臣お實しとぬいり給と申す三人お入ぬ山封を付ぬ
陰陽殿と時晴と兩人の中より申すお陰陽殿をれと申す
せぬ坪の椅子の木のおさうたらお小ぬりたををみる

とてつすか子二と中時時ハはふにと詔つるを云ふと
中大臣時時ハはふと志ありとつりいさ名入とせさせし
時時ハはふ前もふふととの礼まふせんし中々うり礼共
時春ハ當時九重の中より三礼者にと何ふかまにさふの
ふを志ハ程かふふかふかたんと不便と思
志免時程とを入しせりた時春ういふ并ハ礼中んとり
しつとむいけとふ封を切と蓋をひく礼なり礼ハ前二
ツ出と法ハの内をり入たり出とつとふ礼事とと不究
をりさふ家後すふたふ礼事とつと奉親自名ハ入ん

かん子とやまの礼とつら礼事礼は口今坪の枡子乃本の枝
二ツ出るとなるをふと礼ハはかん子とと中ていと時時ハ
又枡子を氣とせりてつら礼事礼は口今坪の始ハ出親。
枡子とやめていと時時ハと礼と中て由事せりてえハの程ハ
氣と中ていと誠前を出と出月ふけは礼ハ出親と中て
庶敷の人いふと奉親ハかんしとやあつら氣とハかん子と
つら礼ハ時時ハに對し遠く出たは口と中て内大臣さういて
誠ハつら礼ハ神妙也何と礼ハせ者共哉として馬是結走
三家と結走馬是完ととむをいさう大臣殿詔しつけ

衛門總時忠藤井中納言資長別當春宮大夫忠親左兵衛
衛將成範右兵衛將賴盛源中納言雅賴權中納言實細
皇太后宮大夫實方右宰相中將實家平宰相茂盛左
宰相中納言實宗左角宰相家通右宰相中將實清堀河川
宰相賴定新宰相中將定範左大弁後經右大弁長方左
京大夫修範太宰大貳親信菩提院二位中將公衡新
二位中將實清以上三十三人右大弁以外、直衣ヲ各給ヘ
テ不參此人、花山院前大政大臣忠雅自任前大納言實長
曰但布衣色看ト云大政入后の處所、向方（リ）大宮大納

言隆季弟一女法性寺殿山子息左三位中將兼房室去七月
以難産此事、泣アテ出仕カ、不吉ト存ラセ、トヤ前右大將
家盛去七月に室家逝去此事、ト出仕志方、ト付所常
此時大納言并大將兩官辞中セリ、ト治部令光隆近衛殿の
山子息二位中將基通宮内令水範七条修理大夫信隆藤三
位基家權大納言朝經所常新三位隆浦木殿山子息三位中
將隆忠以上十三人不参ト共、關ヘ、ト修法結願、ト勸賞
を行セ、仁和寺法親王、ト家山、ト沙汰、ト東大寺修造
セ、礼之後七日、ト修法大衆法灌頂、ト行セ、ト起

宣下あつる上の子法印覚成をりて權大僧都に任^任せ
らる座主宮と二品并牛車の宣旨をりてあつり
仁和寺法親王すこし中あせ給あるにすて
良を以法印に任せらる此兩事藏人頭皇太后宮左兵衛
光範朝臣より是を仰す醍醐聖室僧正信流權大僧
都實録准眼牛王加持を勤く大僧都に任^任す此外七勤
賞共毛奉にいとあつらん右大将宗盛の北の方北帯
を系うせられたりしと山のものに任^任りたりし
去七月に夫いひに孝礼を左衛門侍山乳母に定り給

ぬ北方洞院殿故中山中納言顯時々女りし池建春門院に
のりし皇子受禪の後内侍のすけに成りしと師典
侍殿と申す中宮日教所に孝礼を内へあつせりし
二月八日皇子親王宣旨をりて十五日皇太子にたつせ
りし十七日侍より小太内大臣大夫に右大将宗盛權大夫
に時忠仰りて孝礼をいふこと事給也

室泊遊君歌事

是礼門院后にたつせりし孝礼をいひて皇子の誕生
有る位にけりて外祖父に彌天下を管まに給んとせん

礼事礼と入居二位殿日吉社に百日の詣をすて、のち中礼事
しり志す、大のわさるるかしたに入道思ふ礼事ら、は、
我礼事さんに叶るる起のときおとに頼ま、いせられたる
安藝國一宮嚴島神社一月詣を始く初中さし、或時
入居お國下向の時むりの泊に候のれたら、かの所の習ふ礼と
礼君より参り、思ふ、本マまをひく、或者一人其中に孫やあ、
了年ん思ひす、本マ方りか、本マ流のうに、本マ深ま、本マか、本マか、本マた、本マた、本マと、
あ、本マ夜も十々に、本マ文に及、本マ鶏明志、本マ起り、本マあ、本マす、本マて、本マあ、本マ入、本マた、本マか、
ら、本マ礼と、本マ宿所、本マを、本マし、本マ修、本マら、本マ紅、本マを、本マす、本マり、本マ以、本マ事、本マる、本マ心、本マの、本マす、本マま、本マき、本マ化、本マと、本マ曉、本マは、本マ拍、本マ子

をか、本マと、本マ十、本マと、本マた、本マう、本マ誠、本マ小、本マ者、本マり、本マす、本マの、本マく、本マあ、本マり、本マた、本マり、本マひ、本マた、本マる、本マ上、本マは、本マ小
く、本マ有、本マ事、本マる、本マ是、本マを、本マ用、本マ人、本マ袖、本マを、本マま、本マり、本マの、本マ斗、本マは、本マり、本マれ、本マに、本マい、本マり、本マき、本マる、本マ所、本マと、
多、本マけ、本マ礼、本マ入、本マ居、本マ及、本マ三、本マの、本マ船、本マの、本マし、本マに、本マと、本マ奇、本マを、本マあ、本マく、本マあ、本マり、本マく、本マ世、本マの、本マ定、本マら、本マれ
く、本マ礼、本マを、本マ思、本マひ、本マは、本マけ、本マく、本マ

ニ、本マあ、本マり、本マり、本マぬ、本マら、本マ人、本マり、本マあ、本マれ、本マ口、本マの、本マ身、本マう、本マか、本マむ、本マ礼、本マ事、本マと、本マり、本マあ、本マた、本マく、本マま、本マえ、
入、本マ居、本マ礼、本マ事、本マの、本マ志、本マ多、本マの、本マと、本マ字、本マす、本マ礼、本マ事、本マか、本マや、本マを、本マ用、本マる、本マい、本マと、本マあ、本マり、本マあ、
礼、本マ事、本マに、本マあ、本マり、本マの、本マし、本マと、本マせ、本マの、本マい、本マと、本マ出、本マる、本マい、本マと、本マあ、本マれ、本マと、
と、本マの、本マ一、本マの、本マ事、本マと、本マ越、本マ中、本マ次、本マ部、本マ並、本マ島、本マ尉、本マを、本マと、本マり、本マあ、本マり、本マと、本マ世、本マ前、本マに、本マ引、本マ出、
り、本マの、本マせ、本マの、本マと、本マ信、本マら、本マ礼、本マ事、本マれ、本マ盛、本マん、本マ花、本マ給、本マ而、本マ是、本マ中、本マ令、本マ而、本マ引、本マたり

幸か不幸か、さうな事いなりとあらはれり

西八條札を三尋車

入道成の西八條此宿所の東川に札を焚き、其に於て世を
二りに淋のふと一人の奪らう、かたに似たり今もすれども
消るるも一就中お入道禪川おれまきすむ四宅に起り
と此仁り先よりさふ也今も思ひ言たるは先祖をかとり
耻ぢしん言すまの時始と皇廟を造り大家と宗をけし跡に
向く雲上まのりい上天に乘せり車たぬ志る間忠盛鼻
殿を人のけりま車小思ひいおお氣多し深衣小耻を施さん

とん然先達ら忠盛此心をえと一うを横心の謀を廻して
希有に恥をたすふと一仁のおと一とすふ小三公を極る事
併先世の功德と孰すらういふに所也全以その仁よりすといへ
より當者の知いとをいふはよそ家の名をわけ身の名り何ら
是誠よりさふ也よく致る渥かをもさる此所よりん其皇子
を孫に持て十々に外祖に何んと好所偏と洋海運
此理えすの瑞おを何をもいふん為也欲心は身ほらるん
といへり又もん言ふ慈忠はと一代の繁昌より小重代の悦喜
をかめいといふらんを我身ひとら七欲をせりしと子孫の

ふけれをさすはしん哉大改入る不當歟とせ希りたりんら
并ふ

入るはねのえいををらうしとての海をなすをせす
とふたをたたらり希ら是を二後を三いつら礼けれとも
ふふもんやの車と歎人文者何てといふす死して
京中のす紀人文者を礼を尽して言置れたり大方不詳に
ふふは有希ら小本内府中礼けるは北野天神と無実を
さんとあひいりやうのわきと一人の所は也志るは方人の
おんん事諸人の歎也中宮西かすの礼をなすははは

北野の御前より起請文を書せり夫をかりて外を礼は
はやちし礼けれは此儀無希らとたき人書は十六人を
てて天神に御前にて終日終夜かの起請文をかすは死
土木金日火計月木とて九曜の中に火曜星又はこく星
と云此星七十七星祠をのち所のも也けりもの星の天下の
を人口をしてやのいづん其中一人とて夫を何
をん者より心はりる人トルを賢人世の多をなけり
政を世たれりといへりけり大臣は志記りに人のをんす
を歎ひいひ希らや天神の心は叶ふせて人をとん

せし失を恥せさせぬ事と表也起請文を書所の
人数一千三百三十六人也

宋朝班花大臣事

宋朝班花大臣ハ一日夜の中に一千人詩人を集て誦の風
流をせさせん物す今の入る洋海ハ一日夜の中に一千人
歌人を集て外を交せんとなす本朝漢土ハ如く此
權威の程のいふこと違ふことあはゆり

巖島次才事

今度巖島番信に入るお夢夢想の吉の光るを記叙

を説く志をもく後の山懐に持せよとせと後には二位殿(始に
りか)と夢に云いさけり皇子誕生疑有(とん)と候と下
向ふ所の有者とのや其の京童中者らりや(た)初精
をせしう(の)者始に産をせしめく(の)儲と(す)一(り)
信(ら)る(る)者(の)為(す)とい(つ)の大(事)成(と)せ(り)考(る)平(家)教(育)
を(信)し(ぬ)い(き)考(る)事(は)鳥(羽)院(の)御(座)に(信)盛(安)親(雲)守(に)
て(し)時(の)國(を)も(と)高(野)大(塔)破(塔)志(り)ら(り)と(造)堂(す)
と(し)と(院)が(作)ら(れ)し(け)り(け)り(後)に(岩)島(に)遠(藤)と(て)い(い)
と(い)ひ(考)ら(れ)侍(を)を(せ)り(と)い(は)す(に)造(堂)せ(り)り(ら)り(入)る

高野(す)くろいそ供養を奉りし時八十有餘の老僧
頭(一)雪(小)似(い)る白髪をいた(一)我(一)處(一)に(一)と(一)四(一)海(一)の(一)浪(一)を(一)
た(一)腰(一)に(一)さ(一)す(一)杖(一)に(一)す(一)の(一)を(一)に(一)ち(一)一(一)人(一)出(一)来(一)負(一)能(一)を(一)よ
ひ(一)出(一)し(一)て(一)也(一)未(一)の(一)肥(一)後(一)を(一)後(一)の(一)主(一)の(一)阿(一)比(一)の(一)か(一)み(一)及
の(一)又(一)糸(一)小(一)入(一)ぬ(一)て(一)ん(一)や(一)の(一)あ(一)ひ(一)事(一)に(一)と(一)負(一)能(一)安(一)穩(一)を(一)後(一)の
此(一)り(一)を(一)や(一)事(一)の(一)由(一)を(一)聞(一)く(一)も(一)一(一)人(一)阿(一)比(一)と(一)思(一)ふ(一)れ(一)ん(一)新
我(一)病(一)を(一)負(一)し(一)是(一)と(一)詰(一)し(一)入(一)たり(一)又(一)糸(一)小(一)入(一)此(一)老(一)僧(一)空(一)ひ(一)き(一)る
は(一)高(一)野(一)の(一)大(一)塔(一)造(一)堂(一)し(一)ぬ(一)つ(一)事(一)迄(一)し(一)ち(一)し(一)但(一)又(一)子(一)細(一)有
らん(一)す(一)也(一)越(一)前(一)國(一)辛(一)ひ(一)の(一)社(一)に(一)金(一)剛(一)界(一)の(一)神(一)也(一)北(一)陸(一)道(一)の(一)ち

く(一)生(一)る(一)た(一)り(一)依(一)る(一)阿(一)比(一)の(一)中(一)山(一)と(一)ち(一)く(一)生(一)る(一)の(一)是(一)阿(一)比(一)の(一)北(一)國
乃(一)山(一)の(一)阿(一)比(一)所(一)に(一)居(一)る(一)一(一)言(一)比(一)大(一)阿(一)比(一)是(一)を(一)憐(一)れ(一)し(一)て(一)此(一)所
の(一)林(一)を(一)一(一)め(一)と(一)和(一)光(一)同(一)塵(一)の(一)結(一)縁(一)と(一)て(一)我(一)に(一)近(一)付(一)ん(一)者
を(一)ち(一)く(一)生(一)の(一)苦(一)を(一)け(一)り(一)と(一)奉(一)せ(一)り(一)と(一)必(一)淨(一)土(一)に(一)於(一)て(一)存(一)せん
と(一)し(一)て(一)我(一)を(一)三(一)と(一)敦(一)賀(一)の(一)阿(一)比(一)跡(一)を(一)た(一)れ(一)玉(一)り(一)と(一)し(一)は(一)ま(一)に(一)以(一)て
此(一)社(一)を(一)阿(一)比(一)也(一)阿(一)比(一)の(一)國(一)巖(一)島(一)の(一)社(一)胎(一)藏(一)界(一)の(一)神(一)也(一)此
二(一)社(一)胎(一)藏(一)南(一)部(一)の(一)十(一)八(一)社(一)也(一)巖(一)島(一)の(一)社(一)破(一)壞(一)し(一)て(一)る(一)
此(一)と(一)し(一)て(一)也(一)和(一)殿(一)中(一)て(一)造(一)進(一)し(一)ぬ(一)造(一)進(一)し(一)て(一)る(一)阿(一)比(一)の(一)社(一)
古(一)徳(一)小(一)阿(一)比(一)の(一)阿(一)比(一)を(一)奉(一)り(一)人(一)阿(一)比(一)一(一)此(一)社(一)法(一)盛(一)是(一)を(一)奉(一)る(一)

凡人の如くはありのまゝに汝に畏れ慕はんと欲す
己の老僧大に悦び感涙を流して三々しめ 本手

安藤乃ち貞徳を招れ寄る此老僧乃入りしん所見
来化只一人とす 中 あり 後 した 去 せ 奉 ず あ と せ ぬ と せ ス
貞徳(名) ノ 前 ト 下 リ 僧 ノ 名 座 于 海 小 船 とも 知 ら れ ぬ
思ひに三テもの の 初 と 後 此 老 僧 三 歸 之 官 云 き ぐ ら ぬ や
貞徳を慕は レ ぬ か ぐ る 此 老 僧 と 知 ら ぬ 時 之 の 貞 徳
近 く 参 り たり 老 僧 の 名 も あり 何 じ と 及 ぶ 主 の 安 藤 云 す 及 び け
一人哉 此 大 塔 を 造 営 し たる 地 区 に も け ぬ し ぬ す 所 也

此國巖島此社破塔 ノ 一 り 造 進 志 つ 所 也 右 位 云 一
川 船 舟 ノ 一 を あり し 人 何 ぐ ら ぬ 但 此 化 一 社 とも と 安 と
の 此 塔 中 に あり ぬ 弘 法 の 山 寺 とも あり ぬ 身 の 毛 一 二 して
是 ノ 一 り 此 ノ 一 り 何 れ の も 不 説 きた レ 一 社 とも と 心 取 きた レ 一 社
と 夢 の 如 しく 子 孫 お 傳 へ ぬ 般 高 せん 事 社 何 ぞ たり 化 ゆ ら 祈
中 寺 人 と 寺 中 に 就 居 して 金 堂 に 蔓 陀 羅 を 書 ぐ
安 置 置 け ら れ ぬ 中 寺 人 たり と 靜 妙 以 智 して 院 子 百 法 を
ぬ の 繪 師 たり て の せ ら る 東 寺 人 たり 清 盛 書 ん として 自
筆 に 八 葉 九 字 寶 冠 を 清 盛 我 眼 の 夢 を 出 して 書 せ ぬ

けり下向の後清盛院齋して大師志のいひつる事人有
けり中に奏聞せられたりもれは任を以て修造すしとて
のつく島を修造せむ社を祀りて免る所云へる九間の
回廊を作る修造功をけりく入るは島詣り(正徳宮
志乃いひたりもる大明神内侍にのたて記宜有。汝志れり
屋高野弘法を以告志の事といひて修造車をとも事
込すゆえたり一動におりて我りもる。但今夜夢に成
をいひけんすりて今をのちとす。いふは思
ふにうんとて大明神向ふせりひね清盛院と其後前を

通夜せられたりけれは愛殿の内を根のひる志すも小長刀を
りもるとたりけりもる志すのいをもをせりけれは真の御
畏と是を給はず向せられたりもる志すも小長刀を
巖島の大明神を其下に崇敬すもひける巖島大明神
とよと様の神を在る佛法無分の至意悲牙一の明神也
沙女陽死龍王の娘の龍女にも妹神功皇后にも妹淀
姫にも婦也而正を守護く密教を渡らん謀に皇城をく
端政丑の夢に九月十三日播磨の國いふ野に七夢以座を
帝えり人何れと倫云つる佐伯藏本傳云を兼て河

内國掃明神のまををたえ之に竹の三印南野に多入之
件の座を射す糸に入北座合色の座に九色の座也
公に衿依有共合色の座有り是權者也といひ然るに
若を殺害は常罪科ありといふ所のまの海小流す
る蔵本ありを休めぬに法礼くをあらむれうに
やむらん何み舟つる舟に糸結るを北浦をつた
ひ何るも糸に或日本の時中小浪の舟をたれしれあいの帆を
引し大船一を糸束りを舟を曳れし舟に何れも舟のほか
に糸束りたるをほけり收風にはせ依依り舟に寄たりといふ

とみる者た糸の中よりあまたた女の十二ひとにあり又あまたの
糸も是西の國に互に思ふに何れも舟をたれし舟に何れも舟のほか
既に食物はくを瘦に臨り食事をゆへし何れも舟に何れも舟のほか
と糸束り大小舟れと舟の食物も舟の食物も舟の食物も舟の食物も
まをさるる舟をさるる舟をさるる舟をさるる舟をさるる舟を
いっほも舟に有本糸の舟とすれを舟の舟とすれを舟の舟とすれを
何れも舟に有本糸の舟とすれを舟の舟とすれを舟の舟とすれを
かす舟に舟の舟とすれを舟の舟とすれを舟の舟とすれを舟の舟とすれを
とすれを舟の舟とすれを舟の舟とすれを舟の舟とすれを舟の舟とすれを

せんにつれ、昔の子を中絶す今の仇をあむと我共此に
住せし思ふ事ありては汝先達として此島を去せし作られ
ま礼に蘇牟麻呂の島通津守のこけひより所の浦を
いすまよこりの浦にその濱に所を中絶するに中
よりその浦にいそをよとして所をいらん、阿らいつく
くと作られたりをりていつく島と号はる、山加島とト
昔の故に神武天皇長門國より已住せぬい、時此島の
眺を佳勝あり、用いられ、此島にわらわらせり、いそは
笑の舞をせしめ、えん後、波のうへに舞臺を志つらひ

と蝶智の舞をまさせらる、折言る濱、うらま山のもり
又侍れにりえさの花をうこり、錦の袖をひかへす天小
主ののほよ人の空を樂の海と名を大よ、佳勝あり
此の物にまは有る帝とて、御感の案、に島と名
をかし、山加島と名にける志、今の明神祠とて
いつく島と改なり、蘇牟麻呂の島と名にける、山加島十七間
廻廊、八十間道を、歌を入る、蘇牟麻呂も有る、山加島を
歌を作し、入る、せん、初、一身とて、ま、山加島
三十三、所、い、せり、蔵本都、ま、朝中入、い、山加島

の乳は我を流の者なり流人として救免を蒙らざして上流
世人事いひていふんとりきれは大明神は有る海を是
くすり我は也いふる世ふ合色所原に現せり我は汝を
くたして乳母にせん為とりく上流は信考をへよとの時
霊鳥とありて二三羽のえいを啄つるめて紫衣殿殿農
上にか祀大星三星に光を放ち皇居を照さん時致るく
神候を家進のつとく作す仍く恐く藏本上流して子細
を中へ向く性をなよを氣に作られしとく大なる光三
光座のありて乃上にはんりて神候は十八をよとありり

藏本下向して乃神に宮は凡今の神主是也應護此
詞に曰我一心精誠を拙く孤島の虚山に詣は是則乃心
を發し佛法を無びせん為也仍三十三の大願を及發ん
中に改心の願あり也其文の心に曰く
一度參詣諸衆生三途八難永離苦和光同塵結
縁者八相成道常作佛といへり一度參詣の由はかく
愚乃一隊とせんと言有る其語據佛法大師にありんを
りて色を何とせん我朝に密宗のやいふ事ハ此神の由
於也道由電の由を去く此島にう川らせり事ハ

志々々々々々此志の故也此礼と弘法大師此神小生れ合
まひて七々り弘法とハ漢宗本朝代との賢人也東京朝
大云聖黄石公弘法とハ是也賢主世に出る時をた出
とけく愚王代に出入る時と別近々礼と出るを然るに
我朝に弘法生れしと今此真言を傳りてハ入唐の時と
先叡島に海へて七回者何て願くも我密宗を傳らん
と思ふ志慇懃也三十三の願の中にも一の願のともく我
に力をとてませりとい記略の中にも大明神新に對面
何と我神武天皇四代に三始に供御の家ある故よかま

山に居るといへり是を去る此島にうけりたる事志々々
ふくく此法を真言のたの也とくく入唐有く我現
くて力をたはせりといへり仍弘法入唐を遂むい
く憲和和尚に逢ふとく真言の真儀を極のく均給せん
といへり時天台山上の水をえり桶に入て天にか
けり黒雲とく是を巻上て我朝高野の家に置今
奥の院の向り水是也此黒雲とハいつく島の山づとのよ
と姫の威現也又大師三法をたけり也たすをいつく島先
とく知事何りハ礼とハ妹とハ姫に作るハ又志々龍王に

すべからざる西門の念松を高野山にうつらわすれぬ志するに
大師三法をたけしめんとす誓ふれしことこの三古の意
をたらしん誓を我長たす所と誓ふれし三古飛来と破令
書にうらひの誓に住りし今の三古去是也大師是程迄
批しめしむる誓を礼を誠し而神の山にともをむる弘法
大師改朝の時先いつく島に誓語を大明神に令沈筆
綫一部唐鞍馬弘の礼をえう紫をまひしとせら礼り礼
ふのたえうに本地の文をかたたり。本神親世音。

山に常在神院落。為度衆生故。示現大明神。或岩の
下に隠るる納まの秘密の一人の秘密に一人是を志するは
大縁起の法事と高野山に是を傳へる志礼一人一人を
有しといふこと佛法をうの守りる神明也慈悲心
庶大に誓願自余に起過るる。如是礼もん巖
重の神にす。すん同院より信敬す。海ににや

平家物語卷九 終

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written vertically on the right page of an open book. The characters are dense and difficult to decipher due to the cursive style and fading. A small mark resembling a comma or a short stroke is visible near the top of the text block.

